

〔史料紹介〕

錢屋関係書状について 其三

小笠原 二郎

『国史研究』才四七号（昭和四十二年）に発表し、左書
紙十八面、同五四号（昭和四十四年）に発表した書状十

一通について、このたび才三回分としてとりまとめた
文書は左記のとおり、全部寛書輯で十二通であった。こ

れは数年前、才九代伊東善五郎氏から青森県立図書館に寄贈されたもので、このたびの才三回発表まで前後五十年をへたことになり、これをもって嘉永五（一八五二）年以來一二年間同家に秘蔵されていた関係資料がよきとく日の目をみることになった。たまたま、善五郎氏は、ある昭和四十七年三月二十九日、この発表を待たずして、八十二年の生涯を青森市浜町の自宅に閉ぢたため、この拙文が、筆者であるわたくしに取ってはいまことにささやかながら、同氏追悼の香華となつてしまつた。それは意味で、前後三回にわたる錢屋關係文書の発表が、近世海産史を解く一つの鍵とも、及びくしともなれば幸いだと心から危惧している。またこれがいまとなつては興毛屋、伊東善五郎氏のご高懸におむくいするゆえんにとともに留めて置ける。

なお、末尾に嘉永五年七月廿八日付け、宝龜丸船頭五三右衛門から西村金之丞へあてた金三拜借牛形一枚を付した。これは昭和四十七年上北郡野辺地町主健の才四回近世文書研読講習会座催を機会に同町から発見したもので、錢屋を解後も商取引は正常に行われておつたことを示すに足りよう。これをもって錢屋の地力の底知れない屋しさをみることが出来る。

又の通りである。これらはいづれも、才一、才二回発表の書状と深い関係を持つことは言うまでもないが、特に、才一、才二の寛書類は、錢屋事件の端とめとしての性

	出 人	受 人	年 日
1 寛	錢屋 善助	安保比平次	嘉永五年四月六日
2 寛	錢屋長右衛門	滝屋善五郎	嘉永五年八月
3 寛	錢屋吉右衛門	滝屋善五郎	嘉永五年八月廿四日
4 寛	櫻屋善兵衛	滝屋善五郎	嘉永六年六月十三日
5 寛	水津屋茂八郎外	滝屋善五郎	安政二年四月十一日
6 寛	水津屋茂八郎	滝屋善五郎	安政二年十月
7 寛	錢屋 喜助	滝屋善五郎	安政三年十月
8 寛	渡り七郎太	滝屋善五郎	安政三年十二月廿五日
9 寛	加納屋吉兵衛	滝屋善五郎	安政四年十月
10 寛	錢屋茂太郎	滝屋善五郎	安政六年正月
11 寛	錢屋茂太郎	？	嘉永五年？
12 記	滝屋善五郎？	？	明治八年十二月

格が張いただけに、各項目のタイトルは断罪後の錢屋一家狂気のありさまが紙面に躍如とする。

原文は次のとおり。

(1) 寛 但四月よりを分替ニ付

一金三百五拾兩也

右之通り儘ニ預り申候然上ハ御入用ノ節ハ滝屋善五郎殿此預書を以御請取可被成候爲候日之金子預り一

札如件

子（嘉永五）四月六日

③ 安保氏平治殿

② 錢屋喜助

① 昆助が昆平治から三百五拾兩預かつたことは、のち
安政二年七月十日付けの昆平治から滝屋善五郎へあて
た書状（「国史研究」五四号拙稿「錢屋関係書状」其
ニP31）に明らかである。

② 当時錢屋を取仕切つた支配人格？で肉親以外では事
件の最主要人物。

③ 津輕三ツ廣の回船向屋

〔Ⅱ〕 金子請取一札

一金三百兩也

右者松前江差ニおゐて船玉中荷金入用ニ付態々知工長
又郎差立候向書面之金子無相違御渡シ可被下候為後日
金子受取證文仍而如件

嘉永五年子六月

① 錢屋喜太郎代

宝款丸 長左衛門

② 滝屋善五郎殿

① 五兵衛の長男（「国史研究」四七号拙稿参照）
② 青森の回船向屋（同前参照）

〔Ⅲ〕 覚

一金千兩也

右者此度船中荷代金ニ向付受取申候次第正也此手形を
以喜助殿工御差引可被成候為念請取一札如件

嘉永五年子八月廿四日

加州密腰

錢屋氏太郎手船

請取人

② 宝喜丸 吉右衛門

秋田漢居合立會

宝錢丸 久右衛門

青森
滝屋善五郎様

① 「昆助殿工御差引云々」の文言から、昆助は錢屋と
は別格の他人であることが知られる。このようなこと
からこの覚書は、昆助がまだ錢屋の購算代理人の性格
を持たなかつた、いわゆる錢屋事件が發生する以前の
個別的自由取引が行われていた時点のものと解しても
よいと思う。

② 錢屋の手船宝喜丸の船頭と見られるがはっきりしな

い。ただ、印判により、錢屋を称していたことだけはたしかである。

(四) 覺

一、證文手形入 四匁

右者慶丸吉兵衛殿、錢屋昆助様行之紙を儘ニ受取申候以上

外ニ宝来丸伊助殿を錢屋昆助様行之手紙を通受取申候
丑(嘉永六)六月十三日

錢屋善五郎様

杖屋善兵衛
水屋市右衛門

耳見日付けにより、この証文類が事件発生後のものであること、従つて極秘を要する内容であらうことが知られる。これはこの覺が、当時錢屋と最も親密な関係にあり、事件の内容をすでに知られておつた。身内の人、錢屋善五郎あてに受取証として出されていた、という事からも推察できる。

(V) 覺

一金七百五十拾兩也

但、錢四拾貫を御蔵米千俵

同三拾八貫を、現貝御蔵米千俵

×錢七拾八貫目金百四ツ立
右者御蔵米貳千俵代ニ而儘ニ借用仕候主家預々分之内
に直而差引相渡可申候以上

安政二年卯四月十一日

水津屋茂八郎

宝屋善吉

錢屋治右衛門

代金應丸七郎右衛門

見届人

輪島屋佐助

錢屋善五郎殿

天保年間、青森縣四から①は此町蔵の蔵米、②は黒石藩の蔵米と思われる。また兩者に格差があつたことが知られる。

③錢屋本家を指す。

(VI) 覺

一金七百兩也 通用金

右者当地輪島屋三三郎殿工為替取組代り金請取申候向
以此手形無相違御渡可被成候儀而手形如件

安政貳年卯十月

加州官廳

錢屋茂太郎代

茂八郎

善吉

次右征内

吉兵征

津輕青盛

滝屋善五郎殿

(裏)

表書之内

金五百両 十二月十二日請取

輪島屋与三兵征代

市蔵

二の事情は「国史研究」五四号地稿「銭屋岡保書状
其ニ」P 33の安政三年十月廿五日付輪島屋与三兵征代
り滝屋善五郎あて書状を参照のこと。

(四) 覚

一拾四ノ九百三拾三ノ三分三厘

右者先年御用立金式十兩ヲ直シ当年ケ拾五ヶ年賦御
渡シ方被仰付難有奉存候右之内当年分前書之通り貴
殿ケ様ニ請取申候以上

(安政三) 辰十月

加州

銭屋昆太郎

滝屋善五郎殿

(四) 覚

一錢 八千ノ又

但御印付八千五百俵代

右者銭屋昆助ケ借用手形御返シ被下様ニ受取候以上

辰(安政三) 十二月廿五日

浅利七郎次

滝屋善五郎殿

(IX) 貢

一金四百五拾毫兩

永三拾六匁九分四厘

右者先年^①預ケ物此處売却拂代金様ニ請取申候仍而請取
書一札如件

安政四年巳十月

銭庄

代 吉兵征

滝屋善五郎殿

①加納屋吉兵征云う。安政六年一月廿五日付國人出
シ、滝屋善五郎あての書状(「国史研究」五四号地稿
「銭屋岡保書状其ノニ」P 34)に「昨年預ケ置候五砂
糖之義如何可被成候哉」と記配していることから、そ

事と知られる。

〔Ⅹ〕 寛

一五十兩也 通用金

右御上向御調達金之内此度市蔵指下し候條此半形を以無相違御渡可成候様仍前全形如件

安政六年未正月

加州錢屋長太郎

津輕屋善五郎殿

①安政五年六月付錢屋長太郎から津輕善五郎あての書状へ「目録研究」四七号掲載「錢屋南條書状」P.32によれば、津輕へ弘前藩に對する債権は一万四千百六十五兩である。のいでながら、一般に「お上様」という場合は弘前藩を指すものと解してよい。黒石藩の場合は特に「黒石様」と呼んでいる。

〔Ⅺ〕 寛

子二。月切。三。月切。四。月切の置塩代延うり物代不齊御上候儀之事又同。四。月長せん不齊代外ニ百兩金子取替之外共五〇（一）印。×津輕錢百五十九×六百四十四匁八分が金ニ直シ十五百三十四兩永六十五匁八分五厘港屋善殿方ニ有之外ニ御上へ出置申候依而代品物ハ一品も預り兵之持申上置候

外ニ同人手合式千五百兩子二月津輕様へ御用達申置候ト申上置候其外三ヶ年わりの分式千貳百五拾兩年賦残り之分ハセく物ト申着之よし過事は改而引にして式千五百兩御用立申候と寛申候様申上置候
一 下地之津輕様へ耳賦金ハセヶ計計残りニ相成候分有之様ニ申上置候

①筆者、あて先、年代、共に不分明だが、事件発生後の経過と配置などを書きのけたものと思ふ。

事件発生の子一嘉永五子年と認められる。

②この金額貳千貳百兩は、安政五年六月付錢屋長太郎から津輕善五郎へあてた（3）書状へ「錢屋南條書状」P.31の金額と符合する。

③せんご物は「詮議物」と解したらよいものか。とすれば、今日流に言えば、目下調査追跡中の事件。とでも言うべきであらうか。いづれにしても、この寛元、当事者の誰かの手書きに違いない。

④「下地の津輕様」はまだ用例を聞かないが、特に下地とことわっているところからみれば、弘前を上と見立てたのに対して下の地群は黒石藩の事と解される。

〔Ⅻ〕 ①記

嘉永五子七月々同十二月迄
一金九十六拾八兩

永七拾壹匁八分 入高

同丑正月丁巳年迄

一同式千五百五拾六匁

永五拾五匁貳分八厘 入高

ノ壹万千貳百廿五匁

永廿七匁八分

内

子八月丁十二月迄

五千拾四匁

永五拾壹匁五分

渡高

丑三月丁午年迄

三千七百八拾五匁

永廿七匁四分

渡高

ノ八千七百九拾九匁

永七拾八匁九分

差引残

式千四百廿五匁

永四拾八匁壹分八厘

内

八百匁余 九名不渡分

右者錢屋昆太郎殿先年差引之表ニ候也

(明治)八年十二月

①筆者は不明ながら、末尾の詞書によって、錢屋昆太郎と何者かの間の決済尾を書き留めたものと思われ、また伝存の事情、平素の取引関係からみて、この出書の筆者は滝屋善五郎と推定される。年号は明治と思われるから、一世を驚がした錢屋事件の決末として、^②差引残高千四百廿五匁、この内八百匁余は取立不能のまゝ明治八年を越えた、といふわけである。なお、この「記」は滝屋方を主体と考て、従つて「入高」といふのは滝屋方の借り、「渡方」といふのは貸方即ち錢屋への返済分と考るとよい。

(参考)

金子拝借手形之事

一金貳百七拾五匁也

右之通此度積入申候小麦仕切金ニ而借用仕候処相違無御座候返金之儀着迄々臣助殿罷下り可申候向某部此御紙引替相渡可申為其金子拝借手形依知件

嘉永五年子七月廿八日

加州宮腰錢屋昆太郎給

宝庸丸子三石江内

仙台屋彦兵衛

①西村金之丞殿

①南部領野江地の回船向屋